

第7回エネルギー政策検討会会議議事録(要約)

1 会議の概要

- (1) 日時：平成13年9月17日(月)午後2時30分から4時30分
(2) 場所：ホテルサンルートプラザ福島〔福島市大町〕
(3) 講師：岩手県立大学 学長 西澤 潤一(にしざわ じゅんいち)氏
略歴 東北大学工学部電気工学科卒
東北大学教授(電気通信研究所)
東北大学電気通信研究所長
東北大学総長
日本学士院賞(1974年)
文化功労者(1983年)、文化勲章(1989年)
2000 IEEE EDISON MEDAL(2000年)
現職 岩手県立大学 学長
兼務 財団法人半導体研究振興会 半導体研究所 所長(1968年～)
東北大学名誉教授(1990年～)
東北自治総合研究センター 館長(1997年～)
(社)日本原子力産業会議会長
専門分野 電子通信工学
主な著書 「西澤潤一の独創開発論」
「『技術大国・日本』の未来を読む」
「私のロマンと科学」「人類は滅亡に向かっている」
「東北の時代」「新 学問のすすめ」「人類は80年で滅亡する」
「赤の発見 青の発見」

(4) 次第

- ア 開 会
イ 知事あいさつ
ウ 講 義「原子力政策について」
エ 意見交換
オ 閉 会

2 講義内容(要約)

講義テーマ：「原子力政策について」

- 私は元々原子力の専門ではない。私たちが大学を出て半導体の研究を始めた頃に原子力の研究が始まった。これから先は、原子力の方がはるかに大事であると言われた。
- 私の最初の仕事というのが交流を直流に直す装置。
- 人間というのは道具を使う動物だと言われているが、チンパンジー、カラスでも道具を使う。いずれにしても、効率が非常に悪い道具が多い。
- 逆に言えば人間社会には、まだまだ進歩改良の余地が十分ある。
- 人間は効率が99%の道具を3つしか持っていない。1つはイギリス人マイケル・ファラデーの世界で最初の変圧器、現在、大型のものは、効率99%を上回っている。
- ロンドンのロイヤルインスティテューションにて、ファラデーが実験をやりながら紳士・淑女にサイエンスの基本にわたる講義をした。これは名講義で、特に素人の方々にかなり進んだ科学の話をした。(岩波文庫『ロウソクの科学』参照)
- 私が行った交流を直流に直すというのが第2番目(PINダイオード)。
- 日本人は、判断の基準を持っていない。自分のところでやったものならば自分の国でちゃんと的確な判断をすることが必要である。
- 日本の経済は、輸出で始まる。付加価値の大きいものを外国に輸出することが日本の経済を保つために絶対に必要である。

- 3番目が、直流を交流に変える半導体。
- S Iサイリスタを使い、直流を交流に変えることができた（効率99%）。
- アメリカの研究所が（変換効率が）50%以上になったら直流送電を実用化したいということを書いてきた。こちらもびっくりした。
- 私の、交流を直流に直す、直流を交流に直す、両方の技術が99%以上の効率で実現できることが分かった。
- この仕事がトーマス・エジソンの仕事に非常に密接に結びついている。エジソンのやったいちばん大きな仕事は、発電所を作って線をつないで配電したため、使いたい時はスイッチひとつでいくらかでもクリーンな安定したエネルギーが使えるようにしたこと。
- 是非スイッチを入れる時に10回に1度ぐらいは、これをやったのはエジソンだと名前を思い出しながら使っていただきたい。
- 日本人というのはあまりそういうことを大事にしない。若い日本の人たちに、自分たちもそうろうということをおぼせる非常に大事な要素になる。やがて福島からも新しいことを考える人たちがたくさん出てくることを心から期待する。
- 基本的には日本は自分たちの力で新しいいろいろな展開をしていかなければいけない。
- 原子力の世界というのはほとんどが輸入学問である。教えてもらう時に大事なことは、なるほどねと自分でよく確かめながら入れるということ。よく訳も分からずに言われたとおりにやればいいんだというのが最近特に増えている。
- 原子力は危険なものだが、十分に注意してやればきわめて効果の大きいものである。
- しかし、決して軽々しく粗略に扱っていいものではない。万が一事故が起こればこれは大変危険。
- チェルノブイリなどの最近の一連の事故は、ほとんどが最高学府を出た人が極めて幼稚な間違いをした。
- 私も本当は「もんじゅ」の後始末をやる立場にはない。文部省の審議会の委員をする時に、原子力の勉強はさせられたし、工学という立場から私の今の社会的なポジションがあるから、そういう意味から言えば、工学の一端で出た事故というものに対しては、私はそれなりの努力をする責任があるということも考えて引き受けた。
- 私が引き受けた時に宣言をした。ここでは隠し事をしないこと、嘘をつかないこと、ということをお条件として入れて始めた。
- 反対派2人の内、女性の弁護士さんが、「ここへ来てから本当のことが分かりましたので反対派は廃業いたします。この次からは賛成派になります」という話があった。
- 正常な知識をつかまえると、守るべきことを守ってやれば、人間生活に必要なものを入れるために大変重要な仕事である、ということが言えるのではないか。
- ただし、サイエンスというのはやってみないと分からないところがある。
- 完全に自分が否定しきれたものは否定するが、否定しきれないものは否定したと断言してはいけないという言葉がある。
- やって見たらこういうとんでもないことが起こった、ということはある話。少なくとも人間が想定している以上、そういう危険なことがあるとは今のところは考えられていないということ。
- 「もんじゅ」は残留放射能を征伐し、燃えない燃料も燃えるようにすることに非常に重要な役割を果たしているから、早く「もんじゅ」を動かしてみる必要がある。
- 「もんじゅ」は稼働させてエネルギーを取るのが主目的の装置ではない。どれぐらいお金がかかるのか、ウラニウムの効率の高い燃焼ができるか、念のため動かして運転実績を調べる装置である。
- 日本の総電力を全部原子力にすると、約1年間に1万トンのウラニウムが必要になる。ところが「もんじゅ」がうまく動くと、160トン、1/60になる。もしうまくいくものならやった方がいい。残留放射能がどれだけになるかということもよく検討し、解決できるとすれば、やはり「もんじゅ」は是非実用化したい。
- プルサーマルというのは急遽登場したが、十分効率の高い再燃焼がなかなかできな

い。本当は「もんじゅ」で効率の高い再燃焼を図ることによって、燃え得るものは全部燃してしまう方がいい。

- なぜ「もんじゅ」に一生懸命になったのかを担当者に聞いた。(当初は)ウラニウムの値段が上がると思っていたからとのこと。
- しかし思ったとおりに上がっていない。
- だから、今、新しいウラニウムを買ってきて燃して、燃えかすを貯蔵していくということになっている。
- しかし燃えかすが溜まるということで、このプルトニウムを集めて原爆を作るのではないかということを行う方も一部にあり、やはり「もんじゅ」を動かして、そういう疑いが持たれるものはさっさと燃して十分に活用してしまうということをや方がいいと考えている。いずれにしても早く動かして処置を考えることが大事。
- 私が言ったのは、ウラニウムの値段が安いなら、今のうちにウラニウム鉱山を買い占めておいたらどうかと。
- スーパーフェニックスを止めて解体したフランスが、片方では世界中のウラニウム鉱山を買い占めている。
- 理性的にいちばん安定していると考えられるヨーロッパが、原子力反対になったが、急に高速増殖炉を止めてしまったフランスが、片やウラニウムの鉱山を買収している。
- 従来は非常に理性的でありあまり感情に走らなかったヨーロッパが急にこのような動きに出たということは、大変なショックである。
- 今のところでは非常に怖がって言ってるなという感じを持っている。怖がっているのはチェルノブイリのショックが大変大きく、これがスーパーフェニックスその他を止めることになったひとつの理由だと言われている。
- これから国際的なことを考えながらエネルギーソースを確保しようと考えても、単純思考ではうまくいかない。
- 一人当たりのエネルギー消費量は、長い間非常に少なかった。
- 水車や風車でやっと自然エネルギーを使うということを始め、石油・石炭が燃えるということを見つけた人たちが、これを使いだす。そのうちに蒸気機関が始まった。
- ジェームス・ワットが蒸気機関を発明したという嘘が伝わっているが、そのものの発明はパバンというフランスからスコットランドに移住した人。蒸気を使うことを考えた。
- 当時の蒸気機関は悲惨な労働者の生活を改善するために作られたもの。
- 科学技術の本来というのはサイエンスとヒューマニズムが融合したもの。
- その後エジソンが発電所を作った。そこから電線を引っ張って、いつでも安定した非常に素晴らしいエネルギーを使うことができるようになった。
- やがて風力発電が始まる。風が止まると電気がつかなくなり、風が吹くともものすごく電気が入ってくるから、電気会社は苦勞する。
- 最初に開発をしたアメリカのコースト山脈は、アメリカ大陸と太平洋の間の風で、一年中ほとんど強い風が常時吹き、しかも山の上を越えるときに絞られて非常に風速があった。風力発電を行うのには環境のいい所であり、非常に効果がある。一方、風が、強くなったり弱くなったりするところの電気を使うのは、逆に非常に問題が多い。
- 太陽電池も発電するのは昼間だけで、電気が欲しい夜は発電ができないという問題がある。
- やはり現在使われている発電方法が結構大事な仕事をしている。
- いずれにしても人類生活がレベルアップして、それに伴って一人当たりの消費エネルギーが急速に上がってきた。上がり始めたのは20世紀初頭。言うなれば20世紀というのはエネルギーの世紀であった。
- 一人当たりのエネルギー消費量と人口というものが非常にはっきり対応する。言い過ぎかもしれないが、科学技術が進歩して一人一人が十分にエネルギーを使えるようになった結果、人口が急速に増えていくことになる。
- 人間は毎年1.4%ずつ余計に石油・石炭を採って使うようになった。
- 地球が生まれた頃には炭酸ガス濃度が約90~98%あったと言われている。その

うちに生命が誕生し、植物が生まれた。いちばんたくさん炭酸ガスを食べたのが珪藻や地上植物のシダ。これらの植物は、炭酸ガスを食い尽くし、なんと約0.03%ぐらいまで減った。90%、98%あったのが0.03%へ。とにかく大変高かった炭酸ガスを皆食い尽くしてしまった。それが倒れて土の中に埋まり、石油と石炭になった。

- その頃に神様が動物を作った。動物は酸素と植物を食べて炭酸ガスを出し、出された炭酸ガスの方は植物が受け取り、これを同化作用で炭素と酸素に分け、酸素は残し、炭素は自分の体にする。両方が助け合って共存できる態勢ができるはずだった。
- そこに誕生したのが悪魔と言われる人間。人間の生活ができなくなる過剰の炭素は全部地下に埋ったが、その炭素を掘り返して燃す。神の摂理に真っ向から反対しているということになる。どんどん燃しているが、不思議なことに大気中の炭酸ガスはあまり増えない。これはもう神様が助けてくれているとしか言いようがない。
- 動物は4%になると死ぬ。4%以上の炭酸ガスがあるとヘモグロビンに酸素が付く前に炭酸ガスが付き、動脈を通して体の各部に行く。酸素を付けないで炭酸ガスを付けていくから人間の生理が動かなくなり、人間は死んでしまう。生存不可能になる。
- いずれにしても、きわめて危険な状態にきている。2200年になると危ない。悪い方では2100年ぐらいでも。
- 真鍋先生は、もう海の底はメタンハイドレードでいっぱいだとおっしゃる。「世界中の海からメタンハイドレードが出た。これから相当近いうちに空気中の炭酸ガスの急上昇が始まる」と。いつ頃か。4%になるのは約50年後という結果になった。
- そんなことで火力発電所はこれからあまり増やすことは考え直さなければいけない。
- これは天の摂理で、元々たくさんあった炭酸ガスが石油・石炭になったのであり、やはりこれは燃さない方がいいということになる。そういう意味では、やはり火力というのはこれからあまり期待をしちゃいけない。場合によったらよく調べて、火力発電所は即刻閉鎖することもあり得る話ではないか。
- 海の底にそんなにメタンがあるなら汲み上げて燃せばいいんじゃないかという話もあるが、空気中の炭酸ガスがメタンになる速度の研究も進まないうちにメタンを汲み上げて燃そうというのは、あまりにも人間が思い上がり過ぎてるのではないか。
- 21世紀におけるエネルギーというものは、21世紀における人間の生活を成り立たせるために非常に重要な要素の一つ。
- これから先、何にエネルギーを依存するかを考えると、いちばんいいのは水力ではないか。模範的な開発の例が只見川。ダムを作るのに一ヶ所に作ると非常に大型のダムを必要とし、大型ダムを作るということは環境を変えということになる。しかし只見川のように多段式にすると、一つのダムで発電しなくても同じエネルギーは得られるが、貯水量が少ないから環境に与える影響は非常に少ない。
- さて、直流送電というのは今の太さのケーブルを使っても1万km送電ができる。
- つまり福島で電気が足りなければ、直流送電線さえあれば地球の半分から電気を持って来ることができる。水力をもっと活用し、1万kmの送電というものを実用化すれば、それ以外の発電は全部止めても大丈夫ということになる。
- 例えばラオスとかインダス川、ガンジス川の上流、ヒマラヤ山中あたりには余剰水力が相当量ある。これを活用するということがいちばん優先するのではないか。
- 電線を切られた時には、緊急に国内発電所を動かす必要がある。それにいちばん適するのは原子力だと考えている。日本の場合には、場合によれば原子力第一位、水力第二位という考え方もありうる。
- いずれにしてもこの原子力発電というものを考えてみると、特に「もんじゅ」が動いた場合には1年間にたった160トンのウランウムで賄える。これは石油を備蓄するよりもはるかに効率がいい。そういう意味では是非これからはやはり原子力には相当の力を日本が払うべきではないか。
- また一方では日本が直流送電技術というものを十分にマスターして、これを世界に向かって売っていくということをやっていくのがいちばん大事ではないか。太陽光発電、風力などの電力の不安定を広域連繫によってならしてゆく効果も大きい。

3 意見交換（要約：【 】は、発言者）

【福島県】

- 原子力発電は技術的にはしっかりやれば問題ないと、第一義に取り組むべきだと。将来的には水力発電を考えるべきだとのお話を伺った。
- この検討会で我々が疑問を先生方に伺いながら討論することが、これからのエネルギー政策の合意を図る意味で重要であるということではないか。

【福島県】

- 二つ質問させていただきたい。
- 地下鉄の下に地下鉄を作るといような大深度の問題が今出ている。技術的には可能であっても、本能的に何となく不安な部分がある。今度、大変不幸な出来事がニューヨークで起こって、二つのビルが倒れて隣近所のビルまで倒れる。予測しないことが起きる。
- 科学技術に非常に恩恵を受けて、また生活も快適になり、これからもいろんな場面で科学技術に助けられる部分も多い。
- 20世紀のいろいろな場面を見ると節度がなくなってきたのではないか。科学者は突っ走るだけ突っ走って、振り返らないのではないかというような部分が見え隠れする。
- 高速増殖炉の問題が出たが、ウランで30年、50年十分資源があるとすれば、プルサーマル、あるいは高速増殖炉までいなくても、間に合うのではないか。
- 二酸化炭素の濃度の問題は大変な問題だと思う。例えば原子力で進んだ場合にはどのようになるのか、あるいは火力でこの状態のまま、あるいは倍になった場合、二酸化炭素の濃度がどのようになるのか。ある先生は、原子力は非常に短期的な問題であり、この濃度の問題はもっと大きな長期的な問題で、原子力発電所を作ったぐらいで解決できる問題ではないと言われたが。

【講師】

- やはり原子力に対しても絶えずけじめをつけながら取り組むことが重要。
- プルトニウムが残り、貯めておいて原爆を作るつもりではないかとの疑いを受けないためには燃した方がいいということがプルサーマルのひとつの理由になっている。
- 「もんじゅ」なら徹底して燃すことになっている。プルサーマルを行っても最後は「もんじゅ」を動かさないと完全には燃えない。
- 「もんじゅ」の意味というのは、もう一つは残留放射能がどれぐらいになるのかということ。
- 「もんじゅ」は、試験炉。
- 残留放射能がどれぐらいに抑えられたか、エネルギーがいくら取れるのか、費用がいくらかかったかということについても、データとして取って見ないと分からない。
- プルサーマルにするのか、「もんじゅ」でいくのか、いずれにしてもプルトニウムと残留放射能という問題から、どのように具体化すべきかを定めるべきだ。
- ITER（国際熱核融合実験炉）でやろうという方もいるが、しかし緊急度から言えばその前にやるのがまだいろいろある。
- 二酸化炭素濃度を上げる最大の代物は自動車。その次が火力発電所。全体の約3/4ぐらいが自動車の炭酸ガスであり、これを減らすことは大変大きい。
- 自然界が出す炭酸ガスは出すものもあるが吸い取るものもあり、そんなに多いものではない。
- 例えば有効に植林をして、炭酸ガスを循環させることでも抑えがきく。
- 石炭・石油は炭素の量が多く密度が高いので、材木にして残すと（その容積は）千倍ぐらい必要になる。
- 石油・石炭を抑えるということはどうしても必要になる。
- 例えば、航空機エンジンは電気で水素を作り、水素エンジンにして動かすとか、あ

るいは植物からアルコールを合成して燃すなど、電気エネルギーを十分に活用することで炭酸ガス増加は抑えられる。

【福島県】

- 水力の余剰が世界各地にあるというお話もお聞きしたが、今問題になっているのは、当面の原子力発電所、あるいは当面プルサーマルはどうなるのかということ。
- 「もんじゅ」はいつ頃まで本当に完成された技術として確立されるのか。
- 原子力立地県として、何を当面頼りに原子力というものを考えていけばいいのか。

【講師】

- 水力発電、風力発電、太陽光発電をなるべく活用すれば子孫に迷惑をかけない。
- 今、赤ん坊まで入れて日本人は1日平均バケツに一杯の石油を使っていること自体が心配。
- 我々科学者が、危険性のありそうなことはよく調べておくという態度が必要だった。
- 科学技術は本来は欲望を満足させることよりも、人間の生命を安定して保護することが本来の狙い。
- 「工」とは何かという話がある。上の一本棒は天が与えてくれた自然と自然現象、下の横一本棒というのは地の上の社会。つまり、天の与えてくれた自然とか自然現象というものを有効に活用して、地の上の人と社会に幸せをもたらすものが「工」であるという説がある。
- プルサーマルは暫定技術である。
- 「もんじゅ」は、再会を答申してから3年動いていない。事故がなかったら、研究は終わっているか、終わりかけている筈である。

【福島県】

- 原子力政策は国策だということで地方の関与がほとんどなしに決められている。
- 地方でそれについていろいろな批判、反対の声が上がっている。例えば刈羽村での住民投票、逆に、ある県では原発誘致のために誘致前に住民投票の条例を先に作ってしまうとか、そういう動きがあるが。
- 原子力政策の決定プロセスについて、先生のお考えをお聞かせいただければ。

【講師】

- 「もんじゅ」は調査と補修が済み次第、即刻再開という事を決定した時に条件を2つ付けた。
- 1つは、正当な知識を国民大衆が街の本屋さんに行って本を買ってきて読んだら得られるような状態にしておかなければおかしいということ。
- 2つ目は、あまり自分たちの側に置きたくないから地方に出しちゃえなんていうことで、福島県とか青森県に迷惑をかけてるということは十分に反省をする必要があるということ。地域差別で考えてはいけないと。嫌だから作ってくれというのは地方エゴ。やはり条件で決まること。
- これから先、原子力のみに限らず近代文明の利器というものは変なことをやれば危ないものが非常に増えてくる。
- いちばん足りないと思っているのは担当技術者の責任感。社会に対する自分たちの職業意識を持つこと、自分たちの職業の中から変なことをやったりして世の中の人に迷惑をかけてはいけないという気持を持つことが必要。そのためには、職業意識を学生たちに持たせるように教育をするべきではなかったのか。

【福島県】

- 水力が一番、しかも国内の水力利用ではなく、地球規模でとのお話であった。しかし、わが国は島国であり、当然海の中を電線を引っ張ってこななければならないという問題がある。その技術的な問題がいつの時点で解決できるのか。

- また、海外での水力利用には、20年、30年のスパンで考えないと現実に電力は使えない。
- 一方、わが国の総合エネルギー調査会の、エネルギーを何に求めていくかという考え方の中で、CO²発生量も1990年並にしなければならないということになってくると、どうしても火力にはそう大きく依存できないので、やはり原子力発電でいくべきということになるのか。

【講師】

- 中国は土地が広いので、三峡ダムを中心とした電力系統はほとんど直流送電。
- 日本にも、直流送電の計画がないわけではない。青函30km、大阪と淡路島との間、和歌山と徳島の間は行っており、千葉県富津と東京港の岸壁の間も最終段階。
- 地球の周りに送電線を巻けば、太陽電池で余った昼間の電気はどんどん入れ、足りない夜の電気はそこから取って使うということもできる。風力も同じ。
- 貯めるのは苦手だが、有無相通ずるバーターラインを作ると貯めたのと同じ効果がある。

【福島県】

- 原子力はリスクもあり、できれば使わないで間に合う手法というのはあるのか。
- 分散型のエネルギーシステム、コジェネレーションとか、太陽電池とか燃料電池とかが、たぶんに普及して商業的にも成り立つという考え方があるかと思うが。
- 水力発電の復活もということ。日本は山岳地帯であり、位置のエネルギーは相当開発できる部分があるかと思うが。
- また、高電圧直流型ということで発電ロスを極力下げるとということ。
- 日本のエネルギーというのは（原子力以外でも）かなりの開発予測ができるのではないかと思うが。

【講師】

- 今使われている太陽電池は私の発明した形。ただ残念なことにまだ単価が高く、なかなか実用化に対する目途は十分ではない。採用するまでに時間がかかる。
- やはり水力が自然の神の恩恵を活用するわけですからいちばんいい。風力、原子力がそれに次ぐ。十分に水力発電を開発すれば、これだけで充分足りる。
- ダムを作ろうというと自然環境が破壊されると批判を浴びた。発電用というのは貯水量ゼロでも発電ができる。
- 原子力についても、スリーマイルアイランド事件があって、原子炉の底が抜けて地球の芯まで落ちてしまうかのようなことが言われ、非常に恐ろしさ呼び起こした。人間の不注意は棚に上げて原子炉の恐ろしさだけを言う。
原子力は緊急用中心であろう。
- スウェーデンは、水力発電所、原子力発電所、そして炭酸ガスが出るということで火力発電所も禁止した。発電所が皆なくなった。それでノルウェーから電気を買った。自分のところで発電しないで、被害はよその国に集めたという、地方エゴみたいな問題が出てきた。
- 悪い悪いとショートカットに言うのではなく、人間が科学技術を使う時には謙虚に使うことが必要。
- 物を粗末にしないで十分に大事に使い、それでも足りないというのはどうしてもやむを得ない。人間は生まれてきた以上必ず自然破壊を起こすのであり、ある意味から言うとやむを得ない。なるべく環境を破壊しないですむような生き方を発明・発見するしか生き様がない。
- 行政の中では、早くから対応を考えていくことが、なるべく被害を受けないで政治をよりいい方向に乗り換えていく手段である。

【福島県】

- ベストミックスという言葉がある。フランスは、原発が75%、日本の場合35%ぐらい。このような割合についてのお考えは。

【講師】

- 国によっても違う。例えばフランスはウラニウムを買い占め、原子力によって発電することが相当長く続くと思う。日本は皆が原子力を始めた時にはちょっと先が心細いみたいなことになってくる。近くに水力は相当豊富にある。

【福島県】

- 二酸化炭素濃度の問題、省エネをどう進めるかという問題に関連して。都民はエネルギーの消費量が福島県民より3割多いにもかかわらず、(このような問題は棚上げして)最終廃棄物は東京に穴を掘って埋めるとか、東京湾に原子力発電所や高速増殖炉を作るんだとかいう話が時々出てくる。コストの面とかいろいろ含めて現実的な問題でない。そのことについてのコメントを。
- コストと原子力の関係について。自由化の問題が起きた時に、コスト、コストでやられたら安全性の問題が非常に怖い。また、経済の先生は、コストと原子力は矛盾していて成り立たない、原子力立地はコストを考えたら成り立たないとの話もあった。少なくともプルサーマルでの2兆円以上の設備投資にはたしかにそういう問題もあるのかなと思うが。

【講師】

- 地域性その他で若干の差はあると思うが、(コストは)それほど違わない。
- 「もんじゅ」が動いて先の見通しが立つ。全部残留放射能を減らすということ、原爆を作るんじゃないかなんていう疑いを受けないようにすること、それからエネルギーを取るという要素についての見通しが立つ。
- この間のバランスをどう取っていくかということは、最終的にはやっぱり国民の総意に基づくものでなければいけない。
- しかしいずれにしても今はそこまでいっていない。具体的なある程度のところでそういうものを見通しを立て、最後は国民の総意に問うて判断をするためにも、そのデータをちゃんと持つことが大事。
- どうも日本人というのはフィーリングで判断することが多いが、これからの世の中というのはフィーリングだけではダメで、データとして出して政策を決定するような考え方を使わなければならない。
- 国会でも数字を入れて議論をすれば、責任の問題とか、計画のしっかりとした立案でもプラスになる。原子力がまずその手始めではないか。

【福島県】

- 「もんじゅ」を推進するという時に、将来的なコストや危険性の問題、そういう部分が数値的にも科学的にも本当に検討されているのかどうかという疑問が非常に強いが、お話をお聞きしててほしいのニュアンスは分かった。

【講師】

- 危険な仕事だが、日本の中の電力の安定供給という大変大事な仕事を福島県が率先してやってくさるということに対して、心から感謝を申し上げたい。
- 我々も原子力産業の取りまとめをやっているが、全世界的、せめて全日本的な見地から原子力産業というものをリードしていきたい。

【福島県】

- 本当に先生どうも今日はありがとうございました。